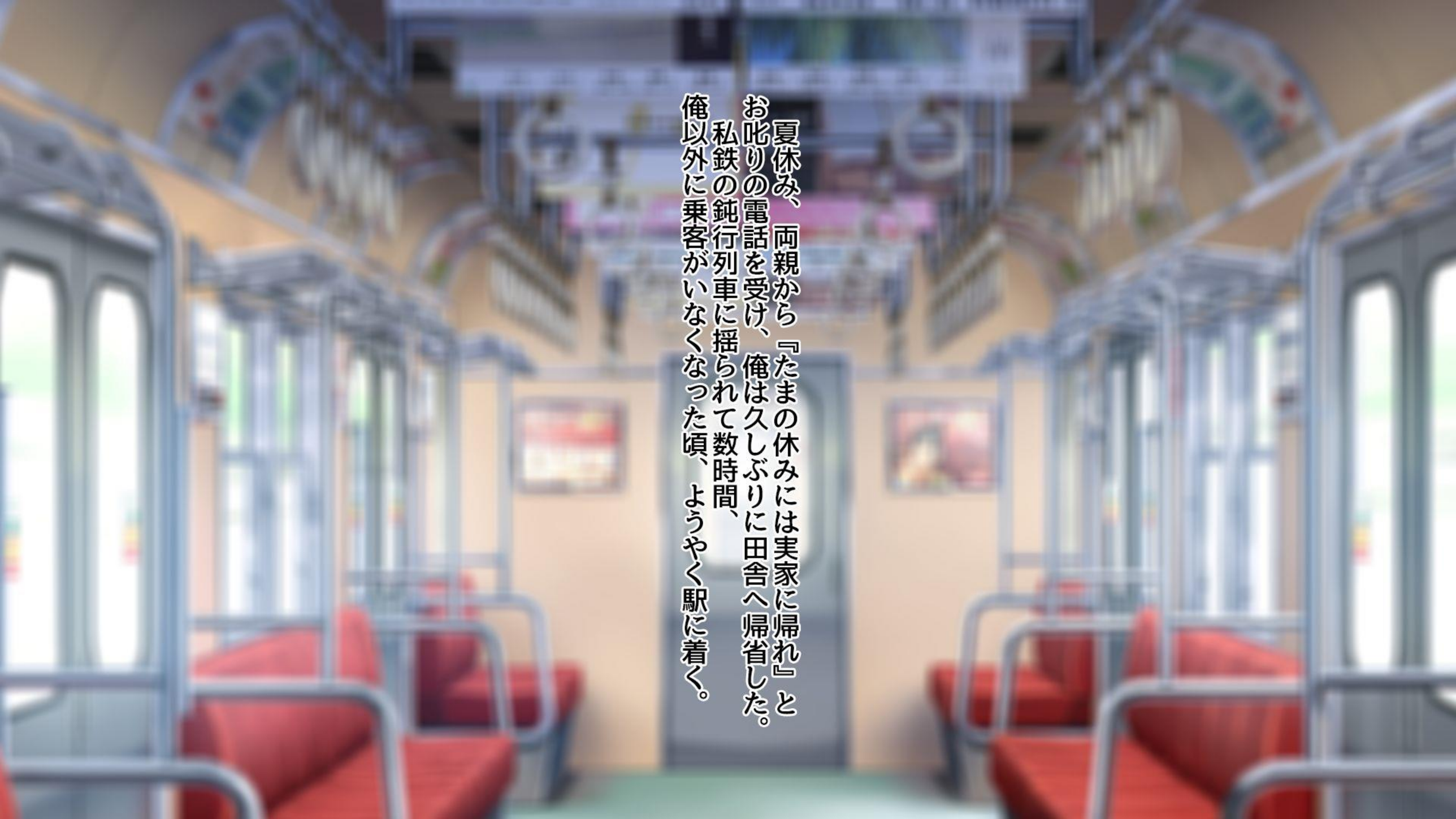
Halcyon Maker
イラスト/ズンにゃんにゃん
双子姉妹は俺の嫁
～夏休みに帰省したら、かわいい恋人が二人もできました～



夏休み、両親から『たまの休みには実家に帰れ』と
お叱りの電話を受け、俺は久しぶりに田舎へ帰省した。
私鉄の鈍行列車に揺られて数時間、
俺以外に乗客がいなくなった頃、ようやく駅に着く。

寂れた駅前に一件だけある売店に行く。
ここで待てば迎えが来るということだったが、
両親の姿はない。
周囲に人影はなく、店の奥に店員のばあさんと
騒がしい女の子が二人いるのみだ。

「…ったく、迎えに来るんじゃなかったのかよ」
両親への文句を呟いて、俺はベンチに座りスマホを取り出す。
そして、電話をかけようとしていたら――

「おわっ！？」
――いつのまにか、目の前に誰かの顔があった。

「えっと…キミはいったい――」
誰だい？　と質問をする前に、彼女は元気よく口を開いた。

おっす！
あんたがいとこの兄ちゃんか！
あたし愛花！
今日からよろしくな！

「え？　イトコ…？」

そうだぜ！
聞いてないのかー？

突然のことに俺は混乱した。
しかし、事態はそれで終わりではなかった。
お…おねえちゃん
まってよぉ～
店の奥から、女の子がもう一人出てきた。
ゆーかも
やっと来たか！
ほら 兄ちゃんに
あいさつするんだぞっ！

あ…えっと……
おにいちゃん…？
は…はじめまして…
優花っていいます…
ゆーかはあたしの
妹なんだぞ！
まあ双子だから
同い年だけどな！
どこかおっとりとした雰囲気の女の子と、
元気いっぱいの女の子。
二人は対照的な雰囲気を持っていたが、
その顔は瓜二つで、一目で双子だということがわかった。
だけど、どうにも状況がつかめない。
「……ごめん、ちょっと電話するから待っててくれ」
俺は彼女たちにそう断って、実家へと連絡した。

なんとなく空を眺めながら、電話をかける。
数コールで電話は繋がり、
『もしもし』という男の声が聞こえる。

「あ、親父か！　いま駅に着いたんだが――」

俺は駅前で双子の姉妹に絡まれていることを説明した。
すると親父は『ああ、言ってなかったか？』と
こともなげに言い捨てた。

――親父の説明によると、この双子姉妹は
二人とも叔父さん（親父の弟）の子供で、
つまりは俺の従妹であるらしい。

叔父夫婦が海外出張をしている間、
実家で面倒を見ることになったのだそうだ。

しかし、既に老年にさしかかった俺の両親は、
双子の遊び相手を務めるにはいささか体力が足りない。

そこで、体力のあり余った若者である俺を帰省させ、
双子の面倒を見させることにしたという――

「って、なんだよそれ！」
俺は電話口に親父に怒鳴る。
しかし、親父は『そういうわけだから頼んだ』と言って、
電話を切ってしまう。

「せっかくの夏休みにガキの子守しろってのかよ……」
俺は溜息をついた。

そして視線を下げると、さっきよりも
なんだかちょっと近づいてきた双子たちの姿が見えた。
電話は終わったなー！
さっ 兄ちゃん何して遊ぶ？
鬼ごっこ？ 影踏み？
缶けりとかも楽しいぞ！
わ…私は…
かくれんぼが
いいな……

――こうして、俺は双子の遊び相手という役目をなし崩しに引きうけることになった。
そしてその後、遊び盛りの双子姉妹に両手を引かれて、炎天下の外へと連れ出されたのだった……。

――それから数日間、俺は毎日のように
双子姉妹の遊びに付き合わされた。

「おおーい、
あいかー！
ゆうかー！
どこ行ったー？」

今日は近所の公園で何度目かの鬼ごっこをしていたが、
インドア派でろくに身体を動かしてない俺に
二人を捕まえられるはずもない。

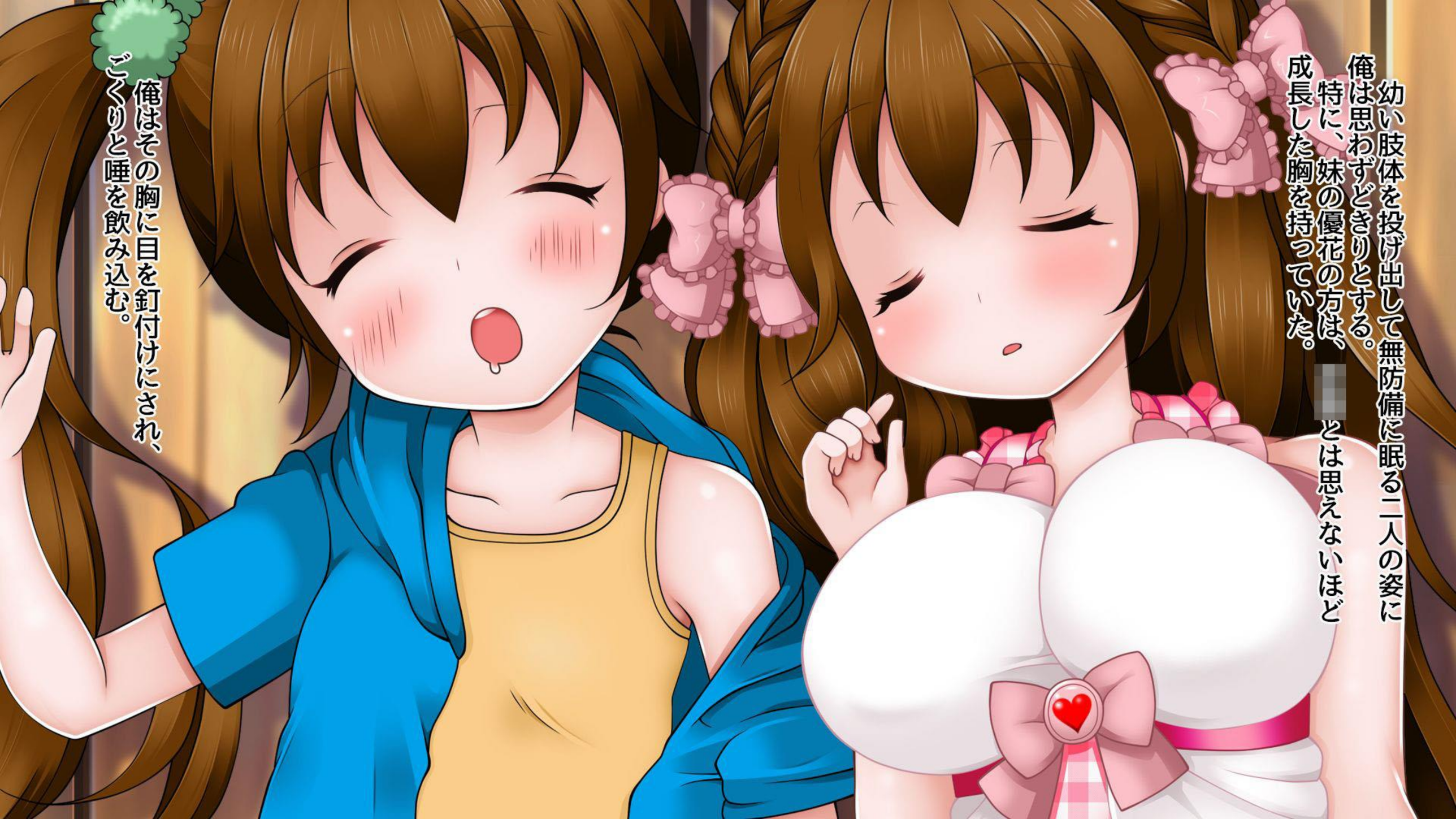
ほとんどずっと俺が鬼として
走り通しでヘトヘトに疲れてしまい、
少し休んでいるうちに彼女たちはどこかへ消えてしまった。

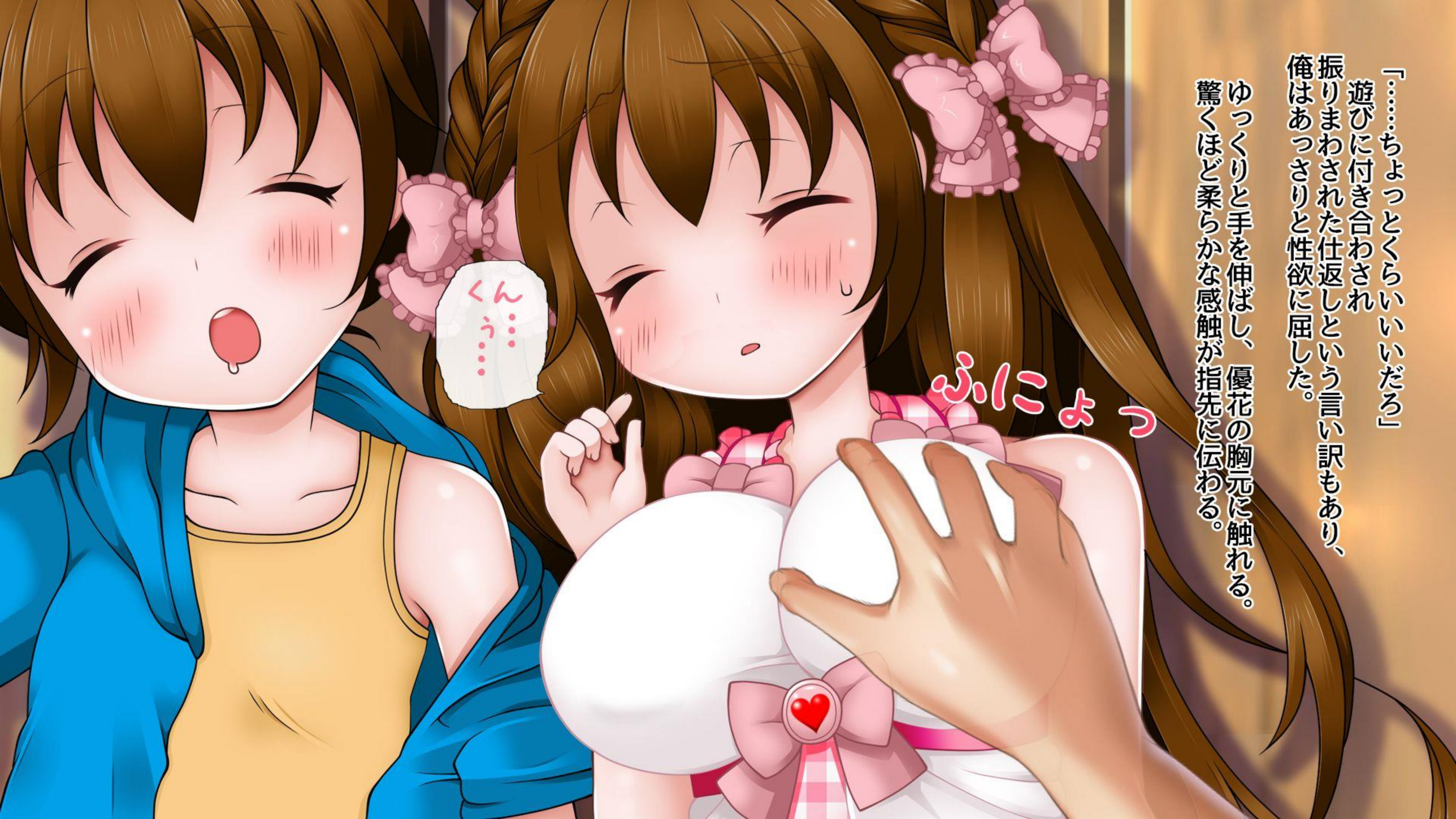
どうも近くにはいないようだ。
俺は、もしかして誰かにさらわれたんじゃないかと思い、
背筋に冷たいものが走る。

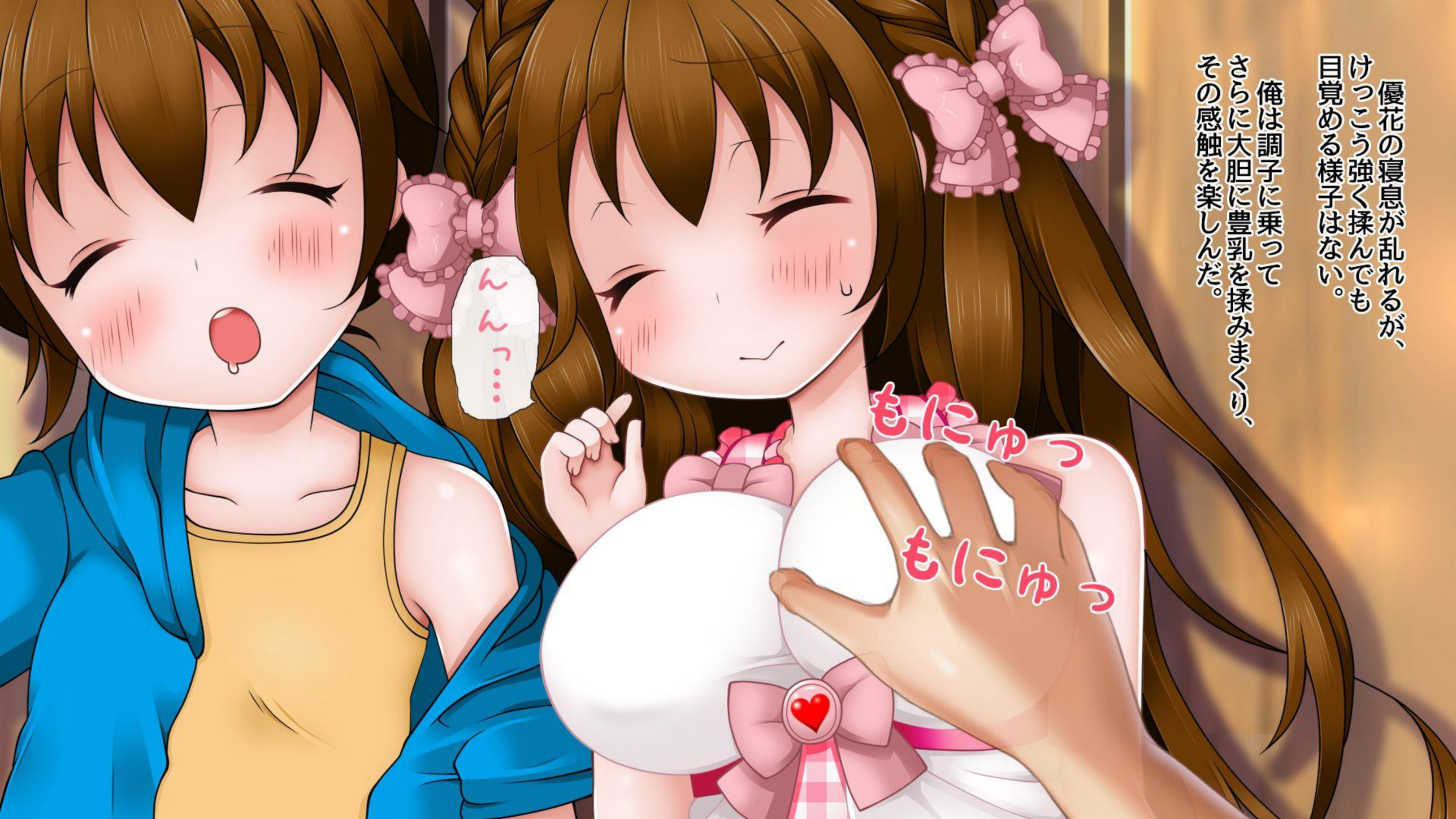
「まずいな…あいつらに何かあれば、
俺が叔父さんに殺されるぞ……」

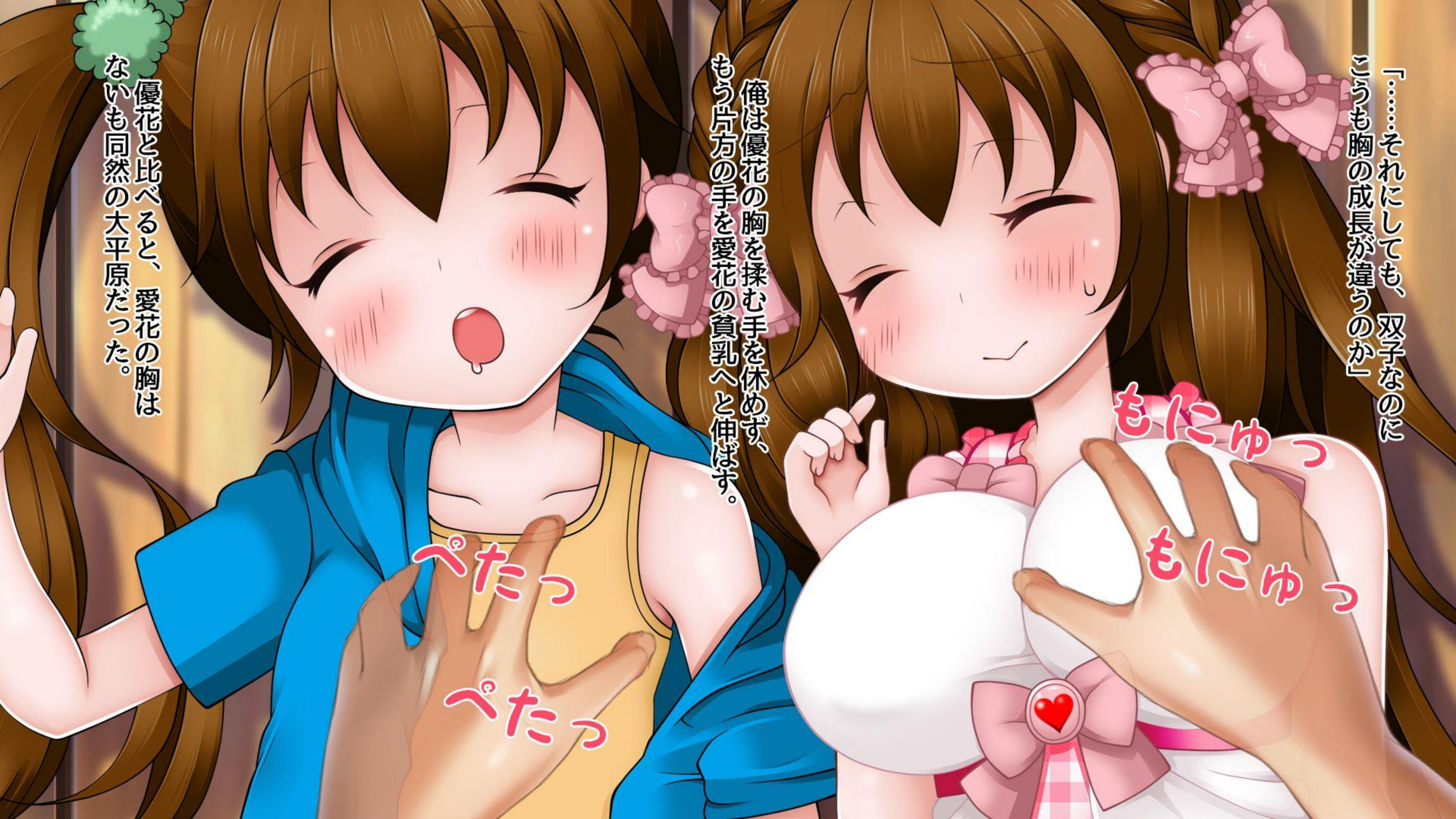
とりあえず両親に報告して捜索を手伝ってもらおう。
そう考えて、俺は急いで実家へ帰ったのだが――

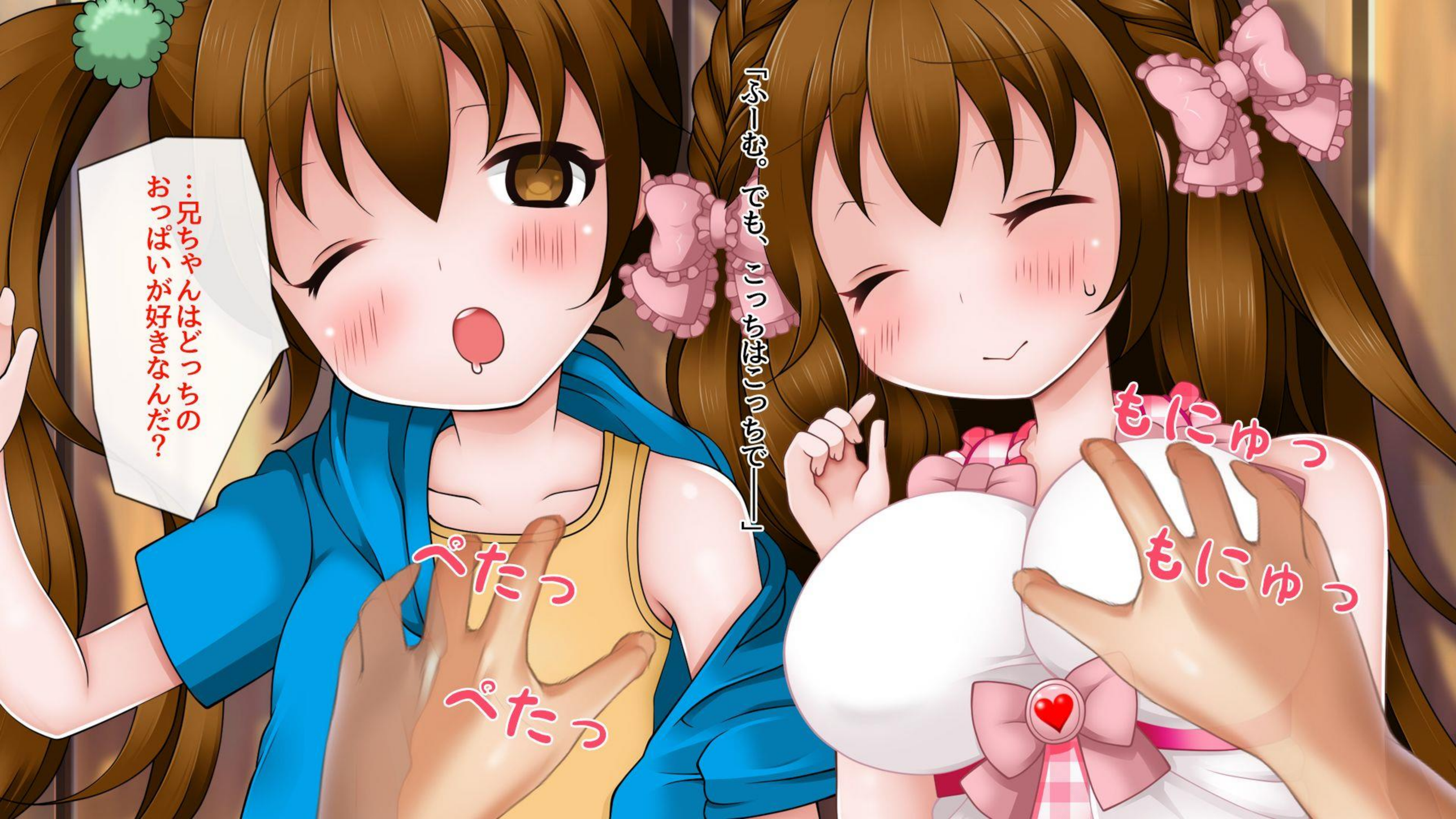
家の縁側で、愛花と優花が二人仲良く並んで寝息を立てていた。
「こいつら…マジか……！人のこと置き去りにしてのん気に昼寝とは……！」
数日間振り回されたせいで、俺の苛立ちは最高潮に達していた。
しかし、だからといって何をするでもない。
「はあ……まあ、ガキに当たっても仕方ねえよな…」
荒い呼吸を落ち着けるため、俺は縁側へと腰掛ける。
そして、改めて眠っている双子姉妹に目をやる。

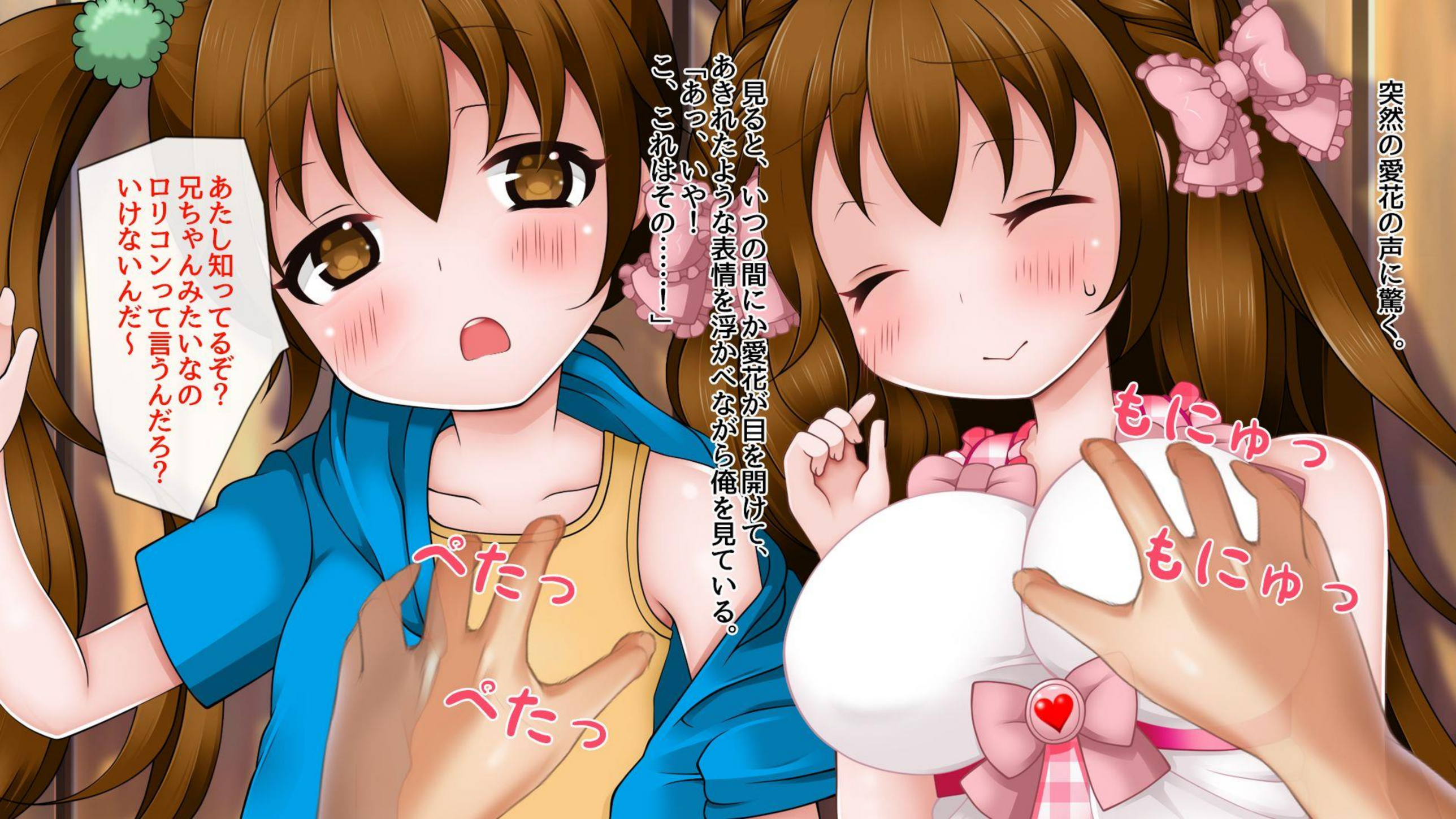

幼い肢体を投げ出して無防備に眠る二人の姿に
俺は思わずどきりとする。
特に、妹の優花の方は、[redacted]とは思えないほど
成長した胸を持っていた。
俺はその胸に目を釘付けにされ、
ごくりと唾を飲み込む。


「……ちょっとくらいいいだろ」
遊びに付き合わされ
振りまわされた仕返しという言い訳もあり、
俺はあっさりと性欲に屈した。
ゆっくりと手を伸ばし、優花の胸元に触れる。
驚くほど柔らかな感触が指先に伝わる。
くんぅ…
ふにょっ


優花の寝息が乱れるが、
けっこう強く揉んでも
目覚める様子はない。
俺は調子に乗って
さらに大胆に豊乳を揉みまくり、
その感触を楽しんだ。
んんっ…
もにゅっ
もにゅっ


「……それにしても、双子なのにこうも胸の成長が違うのか」
俺は優花の胸を揉む手を休めず、もう片方の手を愛花の貧乳へと伸ばす。
優花と比べると、愛花の胸はないも同然の大平原だった。
もにゅっ
もにゅっ
ぺたっ
ぺたっ


…兄ちゃんはどっちのおっぱいが好きなんだ？
「ふーむ。でも、こっちはこっちで――」
ぺたっ
ぺたっ
もにゅっ
もにゅっ


突然の愛花の声に驚く。
見ると、いつの間にか愛花が目を開けて、あきれたような表情を浮かべながら俺を見ている。
「あっ、いや！こ、これはその……！」
あたし知ってるぞ？兄ちゃんみたいなのロリコンって言うんだろ？いけないんだ～
ぺたっ
ぺたっ
もにゅっ
もにゅっ

愛花のとがめるような声を聞いて、
俺は頭の中が真っ白になった。
俺は反射的に二人から離れ、その場で頭を下げる。
「あ、愛花……
こ、このことはどうか
誰にも言わないでくれ！」
――すると愛花は、先程とは一転して
にやにやとした笑みで俺を見た。
「条件……？」
俺がそうつぶやくと愛花はにやりと笑った。

優花とセックスするところ
あたしに見せてくれたら
黙っててあげるぞ！

——あまりのことに、めまいがした。
「な……！
なんの冗談だよ！」
冗談じゃないってば
セックスってやつ
学校で習ってから
ずっと見てみたかったんだ
まあしたくないっていうなら
兄ちゃんが変態だって
言いふらしてやるだけだけどな！
愛花のふてくされた顔を見て、
俺はがっくりと肩を落とした。
こいつはやると言ったら本当にやる奴だと直感したのだ。
「うぅ……くそ、わかったよ。
セックスすればいいんだろ、すれば！」

「お！
やる気になった？
兄ちゃんがんばれ～！」
愛花の能天気な応援を受けながら、
俺は半ばやけっぱちな気分で優花を見る。

「ほらほら
こ～するとすっごくエッチだろ～？」
愛花が寝ている愛花の足をつかみ、
まんぐり返しをさせた。
素早い手際でパンツまでズラされ、
優花の穢れを知らない秘裂があらわになった。
ぺろっ
「おっ…おい、さすがにそこまでしたら起きるんじゃ…」
「だいじょ～ぶだよ！
ゆーかは一度眠るとちょっとイタズラしたくらいじゃ
起きないんだ！」

愛花の言葉通り、
優花はこれだけのことをされても目覚めない。
俺は思ってしまった。
――これはチャンスなんじゃないか、と。
あどけない顔に不釣り合いなほど煽情的な胸。
まだ誰も受け入れたことのない綺麗な秘裂。
それらを見ているだけで股間が疼く。
――ぶっちゃけ俺はガチのロリコンだ。
そして巨乳好きでもある。
ロリ巨乳という奇跡の産物を目の前にして、
しかもそれを犯していいと言われれば
理性を保つことなどできなかった。

俺はゆっくりとズボンと下着を下ろし、
夏の日差しの中に勃起した肉棒をさらけ出した。

「おおっ！
兄ちゃんのちんちんでかいっ！
ロリコンのくせにっ！」

それを見た愛花が大声で叫ぶ。

「ばっ……！？
親父やお袋に聞かれたら
どうするんだよ！？」

俺は背筋に冷たい汗が
つたうのを感じた。

「ん？　ふたりとも出かけてるから
だいじょ～ぶだろ～」

「な…なんだよ…心臓に悪いな……」
だけど、いいことを聞いた。
この双子に何をしても、両親には知られないというわけだ。

「よし…入れるぞ」
俺は優花の秘裂へと亀頭をあてがう。
「うわぁー！
ゆーかのアソコがぱっくり開いちゃった！
お…おおっ……ちょっとずつ入ってる……」
「くうっ……キツいな……」
ずぷっ
ん…？
優花の膣口は、わずかながら愛液で濡れていた。
おかげでなんとか肉棒を押し込むことができた。
「すげー！
あんなにぶっといのに全部入っちゃったぞ！」
興味津々といった様子で愛花が接合部を覗きこむ。

幼い肉がきつく肉棒を締めつける。
俺は頭が痺れるような甘美な感覚に陥った。
「優花のあそこ…パンパンになってるじゃん！」
ずちゅっ
ずぷちゅっ
んんっ…
愛花に見られながらの行為ということも、
いまの俺にとっては快楽のエッセンスでしかない。
理性が溶け、さらなる快感をむさぼるべく
自然と腰が動いてしまう。

眠っている優花は熱い吐息を漏らす。
優花の小さな膣内は肉棒を押し込めば
簡単に最奥の子宮口まで達する。
引き抜こうとすれば肉襞がきつく締め付け、
肉棒を放すまいとしがみついているかのようだった。
くちゅっ
くちゅっ
ずちゅっ
ずちゅっ
むうっ…
ピストン運動とともに鼓動が加速し、
肉棒が脈打ち始める。
「で、射精る……っ！」

腰を一際深く押し込んだ瞬間、
俺は精液を優花の奥の奥まで
注ぎ込んでしまった。
ビクッ
ビュルッ
ビクンッ
ドクッ
ドクッ

ビクッ
ビュルッ
ビクンッ
?
「うわっ！
兄ちゃんもう射精しちゃったのか？」
はしゃぐ愛花の声が聞こえる。
「あたし知ってるぞ？
そういうの早漏って言うんだぞ！」
その間、俺は優花の膣を貫いたまま、
絶頂の余韻に浸っていた。
「しっかし…これだけやっても起きないのか……」
この娘はとんだ大物かもしれない。

「ゆーかは『あの言葉』を聞かないと
なにされても起きないからなー
あはっ……そろそろいいかな？」
そう言って、愛花は小悪魔めいた笑みを浮かべ、
優花の耳元へと口を近づける。
「ゆーか！
朝だぞ！
早く起きろーっ！」
「えっ？」
ふえっ？
――なんということだろうか。
あれだけのことをしても目覚めなかった優花が
愛花の大声に反応して目を開いた。
しばらく目をしばたたかせながら
呆然とする俺の顔と肉棒に貫かれたままの自らの股間を
ぼんやりと見ていた。

そして、優花は目を見開いたまま顔を真っ赤にした。
「いや、これは……！」
俺が頭をフル回転させて言い訳を考えていると、
横から愛花が優花をのぞき込む。
「兄ちゃんは寝ている間に優花とセックスしてたんだぞ！」
え……
え…えっ……？
お…お兄ちゃん
何してるの？

「愛花！？」
こいつ裏切りやがった！

せ…
セックス……？
それって…？

「学校で習っただろ？
男の人が好きな女の人に
おちんちんでズコバコ～ってするんだ」

「よかったな。兄ちゃんは優花のこと好きだってさ」

潤んだ目で俺を見つめる優花にどきりとする。
――とにかく今はこの流れに乗るしかない！

「あ、ああ。好きだよ、優花」

すると、優花はぽっと頬を赤らめる。
う…うれしいです
私…なんだか
身体がぽかぽかして…
よくわかんないけど…
気持ちいいから
私もお兄ちゃんのこと
好きですっ！
――チョロい。
あまりに純粋すぎて、逆に心配になるほどだった。

しかし、いまの俺にはそんな彼女がどうしようもなく愛おしく感じられた。
「優花ッ！　大好きだッ！」
俺はそう叫びながら、再び腰を動かし始める。
ずちゅっ
ずちゅっ
ふぇえっ…！

や…ああっ！
お…お兄ちゃん
乱暴にしないでっ！
言葉とは裏腹に、優花の窮屈な膣内は
さらに収縮して肉棒をきつく締め付ける。
膣奥を亀頭で突き上げると、そのたびに
優花は体をびくびくと震わせる。
ずちゅっ
ずちゅっ

「ゆーか？　セックスって気持ちいいのか？」
好奇心に目を輝かせながら
愛花が横から優花に聞く。
ずちゅっ
ずちゅっ
わ…わかんないよぉ
お姉ちゃんっ！
だ…だけど……
すごいっ…
すごいよぉおっ！

「むー……『すごい』だけじゃ
全然わかんないぞ。
ゆーかは作文得意だろ？
もっとわかりやすく言えよなー」
ずちゅっ
きゃんっ♡
ずちゅっ
それはっ…！
お…お兄ちゃんの
おちんちんがあそこの奥まで
ズンズンって…やぁっ！

健気にも自分の状況を説明しようとする優花の声を聞きながら、俺は射精した。
ビクッ
ビュルッ
ビクンッ
ドクッ
ドクッ
きゃんっ♥
ふあああ…ああああっ♥
あったかいの中に出てるのぉ…♥

射精と同時に絶頂に達したのだろう、
優花は身体を小刻みに震わせながら
放心状態で快楽に感じ入っていた。

「……愛花、これで満足か？
約束通り優花とセックスしたぞ。
こ、これで黙っていてくれるんだよな？」
俺は精液まみれのペニスを引き抜きながら愛花に言った。
「う～ん…ダメかな？」
「なっ……や、約束が違うぞ！」
ドロッ…
あっ♥
「だって、見てるだけじゃよくわかんなかったからさ。
次はあたしとセックスしてくれよ！
そしたら黙っててあげるぞ！」
そう言って、愛花は優香と同じように縁側へと寝転んだ。

体験版はここまで！
双子とのエッチがたっぷり収録された本編は、
購入後にお楽しみくださいっ♥♥♥
あいか
ゆうか